立命館大学
日本文学会 ニュース No. 35
「論究日本文学」第54号 付録 1991.5

本学会の活性化を期待する

一九九〇年度
会長 福田 晃

文学博士がお二人誕生した。岐阜教育大学の佐々木啓一さんと花園大学の山崎国紀さん。長い研究歴のなかで、佐々木さんは『大宰治論』(平成元年、和泉書院)、山崎さんは『森鷗外―基層的論究』(平成元年、八木書店)が審査対象の著書で、いずれも近代文学研究の一金字塔たるべきものである。立命館大学出身の者が研究者の道を選ぶことは、きびしい道程である。それを思うと、満腔の敬意をこめて、お二人に拍手を送る次第である。

今春のもう一つの喜びは、近代文学研究に精進されてきた国末泰平さんが園田女子大学へ転任され、近世文学研究に新境地を開いてこられた山下久夫さんが金沢女子大学へ赴任されたことである。大学のみが研究の場ではないが、専門的研究を保障する機関が大学であることはまごうべくもない。若い研究者の前途を思うと、お二人の栄転は、希望の星となる。今後の活躍に、心からの声援を送りたい。

二十余年前、本学は大学紛争の嵐をまともに受けた。本学会も、それを避けるべくもなかった。それにもかかわらず、当時の専任教員と卒業生、そして一部の心ある学生たちによって、その火は守り通され、一歩一歩、回復の道を歩いて今日に至ったのである。思うことは、そろそろ守勢から攻勢に転じるときではないかと。秀れた研究者集団であるわが日本文学会は、もっと声を大にして、われわれの研究成果を世に問うてゆくべきではないか。

一九九一年度の大会・総会は、本学会創立四十周年を期した学会活性化案が議論されることとなっている。多くの秀れた研究者仲間を世に送り、多くの若い研究者同朋をもりたてる学会として再生したい。この願いは、老いの道にさしかかった小生のみのものではあるまい。会員皆さんの熱い心に期するのである。